

独楽庵の石灯ろう

庭園文化研究分科会 原 裕二

1. 独楽庵へのいざない

今年度の出雲文化伝承館庭園講座は、『出雲流庭園の謎と魅力』の出版を記念して実施した。出雲流庭園(坂田江角家)と独楽庵(茶庭)について、解説と案内が行われた。

今まで知らなかつた興味深い内容が多く、大変有意義な時間を過ごすことができた。

その際、出雲流庭園については何度か解説してきたものの、独楽庵の石灯ろうにはまったく触れていないことに気がついた。

そこで今回は独楽庵にある8つの灯ろうに関して述べる。本来なら独楽庵の歴史や沿革から詳しく述べるべきだが、紙面の都合上、割愛する。武田隆司・伊藤幹郎両氏の講座資料が詳しいので、そちらを参照していただきたい。

2. 石灯ろうの詳細

独楽庵の石灯ろうはそれぞれに○○型灯ろうと記載があるため、本歌(もとになった灯ろうの起源やいわれ)がたどりやすい。

表1に灯ろうの特徴と本歌との関わりを、図1に独楽庵の見取り図をまとめた。

(1)春日大社型(かすがたいしやがた)(図2)

入口の前庭にある。立ち灯ろうの中で最も一般的で、現代でもよく見られる。

春日大社で多く見られるため、その名がついたとされる。実際の春日大社では、古い時代のものは火袋が四角・竿が四角の灯ろう(たとえば御間型)が圧倒的に多い。

江戸後期になると鹿、三笠山、雲十丸穴(月)、格子、四角窓を定番とした「春日大社型」が増加する。本殿の周辺ではあまり見られず、参道の周りに配置されている。いずれも1800年ごろ以降が大半である。初期のデザインは、鹿や三笠山がかなりデフォルメされていて、現代の洗練された形とは異なっている。

(2)龍安寺型(りょうあんじがた)(図3)

龍安寺は宝徳2年(1450)細川勝元が創建した。臨済宗妙心寺派の境外塔頭である。吾唯足知のつくばいや枯山水の石庭が有名だ。

しかし、ホームページの写真に写る灯ろう(たとえば西源院)とはやや違うような・・・。いつか現地で確認したい。

(3)密庵型(みったんがた)(図4)

我が国で国宝に指定されている茶室は、待庵、如庵、密庵である。そのうち、密庵は、臨済宗大徳寺の塔頭で龍光院にある茶室である。小堀遠州の作で、書院風茶室となっている。

龍光院は、黒田長政が黒田官兵衛のために建立した。完全非公開だが、ホームページで見ると、門の外から撮影された写真にそれらしい灯ろうが写っている。

表1 独楽庵の灯ろう一覧表

番号	灯ろう名	特徴	本歌（もとになった灯ろうの起源）		
			場所	由緒・歴史	制作年代
1	春日大社型 かすがたい しゃがた	火袋は六角形。鹿、三笠山、雲十丸穴(月)、格子、四角窓が2つで構成。 竿は丸形	奈良市 春日野町 春日大社	春日大社で多く見られるため、その名がついたとされる。実際の春日大社では火袋が四角・竿が四角の灯ろう(たとえば御間型)が圧倒的に多い。 二の鳥居下の壺神神社には寛政10年(1799)9月のものがあって、江戸時代後期から「春日大社型」が増加する。	不明 江戸時代後期
2	龍安寺型 りょうあん じがた	火袋も竿も六角形。 一面は大きな四角窓、一面は小さな丸穴、一面は小さな上弦の三日月、残りの三面は閉じる。	京都市 右京区 龍安寺	龍安寺は宝徳2年(1450)細川勝元が創建。臨済宗妙心寺派の境外塔頭。吾唯足知のつくばいや枯山水の石庭が有名。 枯山水は、近隣のチャート、三波川變成帯の緑色片岩、丹波の石で構成される。	室町時代
3	密庵型 みったんが た	火袋は六角形、竿は丸形。 三面に小さな丸穴、一面に四角窓、二面は閉じる。	京都市北区 龍光院	密庵は、臨済宗大徳寺の塔頭 龍光院にある茶室。小堀遠州の作。 書院と草庵が融合した書院風茶室(国宝)。 龍光院は、黒田長政が黒田官兵衛のために建立した。国宝の曜変天目茶碗が有名。完全非公開。	江戸時代初期
4	延寿院型 えんじゅい んがた	火袋は六角形。二面が四角の窓、残り四面は閉じる。 竿は円形。節が3か所あり、竹の節型。	三重県 名張市 延寿院	天台宗延寿院の本堂正面にある。 現在は柵で囲まれている。花崗岩製。重要文化財。	鎌倉時代後期 徳治2年 (1307) 11月
5	石清水八幡 型 いわしみず はちまんが た	火袋は六角形。二面は蓮座のついた丸窓、二面は四角窓、二面は閉じる。竿は丸形で節が3か所。	京都府八幡市 石清水八幡宮	社務所書院の枯山水庭園に立つ。 庭園は1952年重森三玲が手がけた。花崗岩製。重要文化財。	鎌倉時代後期 永仁3年 (1295)3月
6	春日大社 御間型 かすがたい しゃおあい がた	火袋は四角形。それぞれに四角窓。竿も四角。節はない。中台の各面に獅子が向かい合って走る。	奈良市 春日野町 春日大社	春日大社本殿から若宮神社に通ずる御間道(おあいみち)の西側南端に立っていた四角型灯ろう。今は国宝殿にある。花崗岩製。今の御間道にある灯ろうは火袋が木製。	鎌倉時代後期 元享3年 (1323)11月 宥弘敬白
7	東大寺法華 堂型 とうだいじ ほっけどう がた	火袋は六角形。二面が四角の窓、残り四面は閉じる。 竿は円形。節が3か所	奈良市雜司町 東大寺	東大寺法華堂(三月堂)は奈良時代に建立され、天平文化を伝える仏堂である。正面の礼堂の中央に立っており、重要文化財である。 花崗岩製(奈良石)。宋から帰化した石大工・伊行末(いのゆきすえ)が製作。	鎌倉時代中期 建長6年 (1254) 10月12日
8	高桐院型 こうとうい んがた	火袋は六角形。二面は大きな四角窓、二面は小さな丸穴、二面は閉じている。中台の各面に2匹ずつ獅子が彫られる。竿は円形、節が3か所。	京都市 北区紫野 高桐院	臨済宗大徳寺の塔頭。細川忠興(三斎)が父・細川藤孝(幽斎)のために慶長7年(1602)に創建した寺院。細川家の菩提寺。 細川忠興とガラシャの墓標となっている立ち灯ろう。もとは千利休が愛蔵したもので、のちに譲り受けた。	鎌倉時代

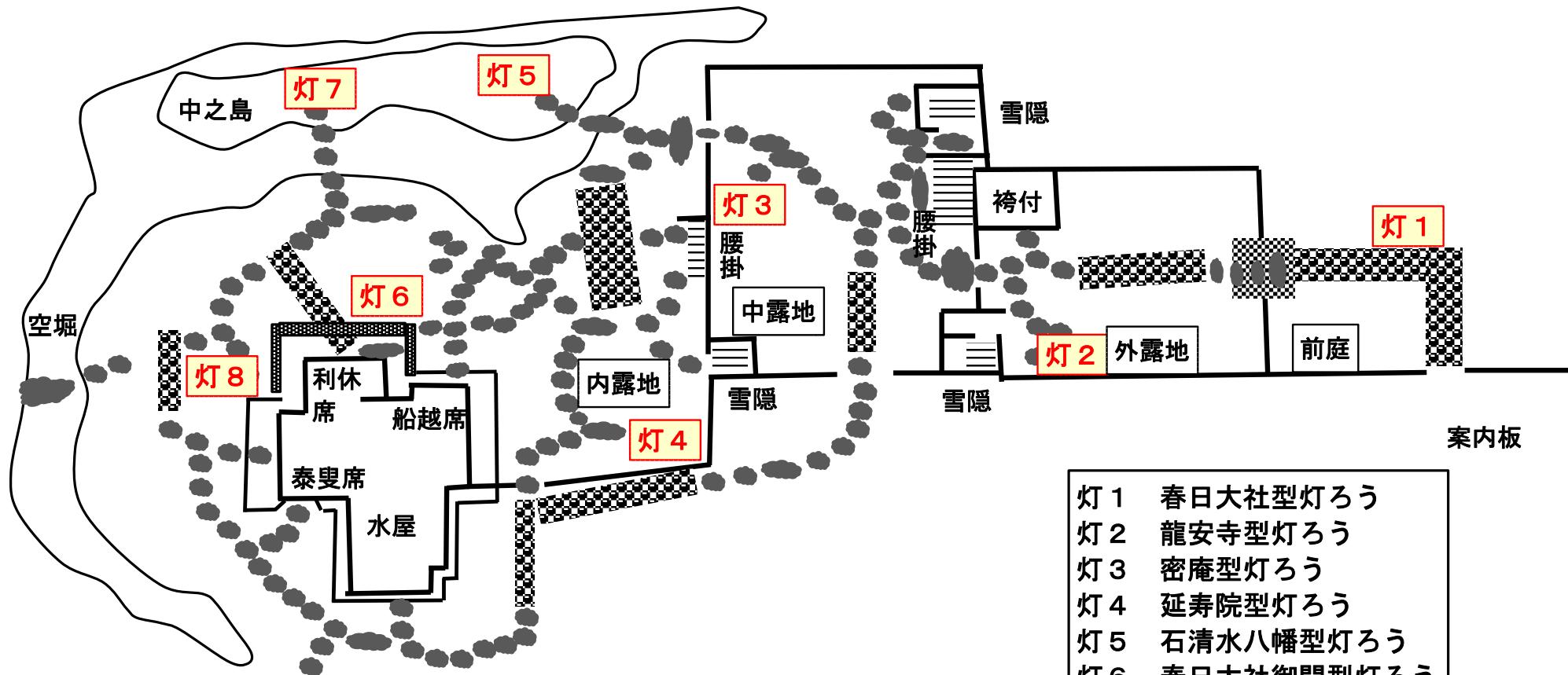


図 1 独楽庵見取り図

現地案内板をもとに作成

- | | |
|-----|------------|
| 灯 1 | 春日大社型灯ろう |
| 灯 2 | 龍安寺型灯ろう |
| 灯 3 | 密庵型灯ろう |
| 灯 4 | 延寿院型灯ろう |
| 灯 5 | 石清水八幡型灯ろう |
| 灯 6 | 春日大社御間型灯ろう |
| 灯 7 | 東大寺法華堂型灯ろう |
| 灯 8 | 高桐院型灯ろう |



図2 春日大社型灯ろう
火袋は六角形。鹿、三笠山、雲十丸穴
(月)、格子、四角窓が2つ。竿は丸形



図3 龍安寺型灯ろう
火袋も竿も六角形。大きな四角窓、
小さな丸穴、小さな上弦の三日月、
閉じた面



図4 密庵型灯ろう
火袋は六角形、三面に小さな丸穴、
一面に四角窓、閉じた面。竿は丸形。



図5 延寿院型灯ろう
火袋は六角形。二面が四角窓、四面は
閉じる。竿は円形。竹の節が3か所。

(4) 延寿院型 (えんじゅいんがた) (図5)

三重県名張市の天台宗延寿院の本堂正面にある。現在は柵で囲まれている。

徳治2年(1307)11月の刻字があり、花崗岩製である。鎌倉時代の灯ろうは、石清水八幡宮型や東大寺法華堂型、高桐院型とともに、竿が円形で、節が3か所あるデザインが多い。

(5) 石清水八幡型 (いわしみずはちまんがた) (図6)

京都府八幡市の石清水八幡宮 社務所書院の枯山水庭園に立つ。庭園は1952年重森三玲が手がけた。永仁3年(1295)3月の刻字があって、鎌倉時代後期の作とされている。

(6) 春日大社御間型 (かすがたいしやおあいがた) (図7~8)

春日大社本殿から若宮神社に通ずる御間道(おあいみち)の西側南端に立っていた四角型灯ろうである。今は国宝殿に保存されている。

元享3年(1323)11月宥弘敬白の刻字があり、鎌倉時代後期の作である。しかし他の鎌倉時代の灯ろうとは異なり、火袋は四角形で4面とも四角窓が開いている。竿も四角形で、節はない。中台の各面に獅子が向かいあって走るのが特徴である。

(7) 東大寺法華堂型 (とうだいじほっけどうがた) (図9~11)

東大寺法華堂(三月堂=国宝)は奈良時代に建立され、天平文化を伝える仏堂である。正面の礼堂の中央に立っている。花崗岩製(奈良石)。

鎌倉時代中期の建長6年(1254)10月12日の刻字があり、宋から帰化した石大工・伊行末(いのゆきすえ)が製作したとされている。

年代から考えると、まず東大寺法華堂に宋から、「火袋が六角形。竿が円形で節が3か所」の灯ろうがもたらされ、それが延寿院や石清水八幡宮、高桐院などに広まつていった可能性がある。春日大社御間型の四角形の灯ろうは、また別の系統であると考えられる。

(8) 高桐院型 (こうとういんがた) (図12)

高桐院は臨済宗大徳寺の塔頭で、細川忠興(三斎)が慶長7年(1602)に創建した。細川家の菩提寺である。灯ろうは、細川忠興とガラシャの墓標となっている。

もとは千利休が愛蔵したもので、のちに細川家が譲り受けた。

3. 石灯ろうの謎

岩石の産地は不明である。

京都周辺の石材は、白川石を中心と聞いたことがある。しかし、筆者の知識がないため判別がつかない。

独楽庵は、平成3年(1991)に開館した。この頃になると、石材はその気になれば日本だけでなく世界中から集めることができ、産地の特定は困難である。

しかし、もともとは千利休が中心となって建てられ、松江藩七代藩主松平治郷(不昧公)によって大切に伝えられてきた茶室を復元したものである。

ありきたりの材料を寄せ集めたものとは思えず、設計者の意図を十分に表現できるよう吟味されたものと考えられる。



図6 石清水八幡型灯ろう
火袋は六角形。蓮座のついた丸窓、四角窓、閉じた面。竿は円形。竹の節が3か所



図7 春日大社御間型灯ろう
火袋は四角形。それぞれに四角窓。
竿も四角。節はない。



中台の拡大図
中台の各面に獅子が
向かい合って走る。



別の面にも陽刻。魚かカニに見えるが
獅子！



図8 春日大社の御間道
春日大社幣殿・舞殿から若宮
神社に至る通路。
火袋・竿とともに四角形の灯ろう
が立ち並ぶ。
本歌の御間型灯ろうは、西側
南端にあった。



図9 東大寺法華堂型灯ろう
火袋は六角形。二面が四角窓、四面は
閉じる。竿は円形。竹の節が3か所。



図10 (本歌)東大寺法華堂の灯ろう
「建長6年(1254)10月12日」と竿の刻字が
はっきり読める。



図11 (本歌)東大寺法華堂(三月堂)
灯ろうはその正面に立つ。



図12 高桐院型灯ろう
火袋は六角形。二面は大きな四角窓、
二面は小さな丸穴、二面は閉じている。

中台の拡大図
中台の各面に獅子が2匹ずつ
彫られている。



今後は本歌となった灯ろうと比較しながら石材の産地や出自を調べたいが、拝観不可の場所が多いので困難が予想される。

一方で、庭石や飛び石には、出雲流庭園でもなじみ深い三刀屋石(大東花崗閃綠岩)や横田花崗岩がふんだんに用いられている。

これらの関係も考慮しながら、総合的に判断したい。

4. 参考文献

伊藤幹郎(2025)：独楽庵と三千家の露地，令和5年度出雲文化伝承館庭園講座資料。

武田隆司(2025)：出雲文化伝承館の2つの庭の関わり，令和7年度出雲文化伝承館庭園講座資料。

石仏と石塔(2025/10/15閲覧)：<https://www.kawai24.sakura.ne.jp/index-1.htm>.